

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座4-13-11 文明堂3F
電話三五四-一五四七-一番

清元協会

世田谷区桜一-13-12
電話三七〇-六一九五-二七番

財団法人 古曲会

中央区銀座八-六-三 新橋会館
電話三五七-一〇二一-六番

新内協会

新宿区神楽坂六-27
電話三二六〇-一八〇四番

常磐津協会

港区南青山七-七-15
電話三四〇七-七四五三番

社団法人 長唄協会

中央区銀座二-11-19
電話三五四二-一六五四番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二-15-12-1403
電話三五八五-九九一六番
(五十音順)

助成 東京都 芸団協・邦楽振興基金

平成十七年三月五日(土)

国立劇場小劇場

第一部 十二時開演 三時三十分終演

第二部 午後四時開演 七時三十分終演

2005 都民芸術フェスティバル

第三十五回 邦楽演奏会

邦楽名曲選

2005都民芸術フェスティバル参加公演一覧

種目	演目等	開催日/会場	連絡先(主催団体)	
オペラ	藤原歌劇団公演 ロッシーニ作曲「ラ・チェネントラ」全2幕	2/10・11・12 Bunkamuraオーチャードホール	日本オペラ振興会 03-5466-3181	
	東京二期会オペラ劇場公演 フランツ・レハール作曲 オペレッタ「メリー・ウイダー」	2/18・19・20 Bunkamuraオーチャードホール	二期会オペラ振興会 03-3796-1831	
	日本オペラ協会公演 青島広志作曲「たそがれは逢魔の時間」 別宮貞雄作曲「三人の女達の物語」	3/11・12・13 イイノホール	日本オペラ振興会 03-5466-3181	
オーケストラ	東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団	1/14	東京芸術劇場大ホール 日本演奏連盟 03-3437-6837	
	読売日本交響楽団	1/30		
	新日本フィルハーモニー交響楽団	2/4		
	東京都交響楽団	2/10		
	NHK交響楽団	2/27		
	日本フィルハーモニー交響楽団	3/4		
	東京交響楽団	3/17		
室内楽	「ピアノトリオの夕べ」	1/20	東京文化会館小ホール 日本演奏連盟 03-3437-6837	
	「ハッハ・コレギウム・ジャパン」	2/2		
ポピュラー	「ビッグバンド フェスティバル」	2/11	日比谷公会堂 日本音楽家協会 03-3585-3903	
	「シャンソン・タンゴ・ラテン名曲選」	2/12		
邦楽	第35回邦楽演奏会 義太夫・清元・古曲・新内・常盤津・長唄・三曲	3/5 国立劇場小劇場	義太夫協会(邦楽連合会) 03-3541-5471	
現代演劇	「ふたりの老女の伝説」	2/25~3/6 紀伊国屋サザンシアター	日本劇団協議会 03-3341-8151	
児童・青少年演劇	合同公演「お伽芝居 春若丸」	3/19~31 前進座劇場、ルネこだいら他	日本児童・青少年演劇回協同組合 03-5269-2036	
バレエ	「ドン・キホーテ」	3/29-30-31 東京文化会館大ホール	日本バレエ協会 03-3499-5525	
	「三銃士」全幕	3/4・5・6 ゆうぽうと簡易保険ホール	牧阿佐美バレエ団 03-3360-8251	
	「ラ・シルフィード」全2幕	2/11・12・13 東京文化会館大ホール	日本舞台芸術振興会 03-3791-8888	
現代舞踊	「ありす」、「白い犬」、「クワイツェル・ソナタ」、「Veil」、「interspace」ほか	2/11・12 新国立劇場小劇場	現代舞踊協会 03-5457-7731	
日本舞踊	第48回日本舞踊協会公演	2/11・12・13 国立劇場大劇場	日本舞踊協会 03-3533-6455	
能楽	第45回 式能	2/20 国立能楽堂	能楽協会 03-5925-3871	
民俗芸能	第36回東京都民俗芸能大会 「東京の獅子舞とお囃子」	3/1・2 東京芸術劇場中ホール	東京都民俗芸能大会実行委員会 03-3471-1355	
寄席芸能	第35回都民寄席	三遊亭國歌ほか	3/2 町田市市民ホール	都民寄席実行委員会 03-5286-0876
	笑福亭鶴光ほか	3/5 八王子市市民会館		
	柳家小三治ほか	3/16 東京芸術劇場中ホール		
	桂歌丸ほか	3/21 瑞穂町瑞穂ビューパークスカイホール		
	(浪曲の会)澤孝子ほか	3/6 江戸東京博物館ホール		



二〇〇五年都民芸術フェスティバルの開催に寄せて

東京都知事 石原 慎太郎

都民芸術フェスティバルは、芸術文化に親しむ機会を広く都民に提供するとともに、東京における芸術文化活動の振興を図ることを目的に開催されるもので、東京都が芸術文化団体の公演に助成しており今年で三十七回目を迎えます。

東京の春を彩る行事として本フェスティバルの開催を心待ちにするファンの方も多く、今年もその期待に応え一月十四日から三月三十一日まで、都内各地で延べ七十三の舞台公演が実施されます。

芸術文化は私たちの創造性を育み表現力を高めるとともに、心豊かな社会を形成し、都市の魅力を高める重要な要素です。今後とも、この東京を長い歴史に根ざす文化と伝統を背景にその潜在力を発揮させ、多様な文化の発信・交流拠点として世界中の人々を惹きつける都市にしていきたいと考えます。

皆さんには、各会場で繰り広げられる伝統芸能をはじめ音楽、演劇、舞踊、など、多彩な舞台芸術を堪能していただくとともに、特に若い方にはこの機会に芸術文化に親しんでもらうことを期待しています。

終わりに、本フェスティバルに参加された皆様の御尽力に感謝するとともに、本公演の御成功と今後ますますの御活躍を祈念して、挨拶といたします。

第一部 番 組 (十二時開演)

一、 箏 曲

赤

松本一太 作詞
中能島欣一 作曲

壁

の

賦

箏

中能島

弘子

箏替手

北

村

紗海能

岡

素芽能

須

崎

晴華能

松

美音能

岩

脇

紀伊能

緒

沙和能

德

丸

十盟

鈴

美那能

尺八

德

丸

十盟

村

由美能

二、 常磐津

廓

の

仇

夢

(権八)

浄瑠璃

常磐津八重太夫

三味線

岸

沢

式佐

同

常磐津松重太夫

同

岸

沢

式松

同

常磐津文重太夫

上調子

岸

沢

式明

三、 一中節

お

夏

笠

物

狂

(お夏)

浄瑠璃

都

志

中

三味線

都

英中

同

都

了

中

同

都

幹中

四、 新内節

明

烏

夢

泡

雪

雪責め

浄瑠璃

富士松

小

照

三味線

新

内

勝一朗

上調子

鶴

賀

伊

勢

一郎

休

憩 (十分)

五、

長唄

越えち

後ご

獅子し

同唄

稀音家

稀音家

清水

光

同三味線

吉住

小三代

六、

義太夫

壺坂つぼさか觀音かんのん靈驗れいげん記き

— 沢市内さわいちうちの段 —

浄瑠璃 竹本越道

三味線 鶴澤友路

七、

清元

深山みやまのはなとど桜かぬ及兼えだぶり樹振

(保名やすな)

浄瑠璃 清元 延明寿
同 清元 延清恵
同 清元 延佳月
同 清元 延綾

三味線 清元 延八寿美
同 清元 延美葉
上調子 清元 延志寿佳

(終演予定 午後三時半ごろ)

第二部 番 組 (午後四時開演)

一、箏曲 千鳥の曲ちどり きょく

尺八	川瀬順輔	箏本手	川瀬白秋	箏替手	清水芳秋
		佐藤阜秋	高山崎扇秋		
		白石昌秋	高橋翠秋		
		大坪正秋	村山朋秋		
		小林露秋	近澤惠秋		
		長塚梨秋	大島敬秋		

二、新内節 千日寺名残鐘せんいちでらなごりのかね

浄瑠璃	鶴賀若狭掾	三味線	新内勝鳳
		上調子	賀伊勢次郎

(三勝)

三、河東節 熊野くまの

浄瑠璃	山彦ちか子	三味線	山彦東子
同	山彦幸子	同	山彦佳子
同	山彦幸代	同	山彦朋子

四、義太夫 加賀見山旧錦絵かがみやまこさようのにしきえ

尾上竹本駒之助	三味線	鶴澤津賀寿
お初竹本綾之助		

— 長局の段 —
ながつぼね

—— 休 憩 (十分) ——

五、

常磐津

乗合船のりあいぶね恵方えほう万歳まんざい

(乗合船)

浄瑠璃	常磐津和佐太夫
同	常磐津菊美太夫
同	常磐津和洗太夫
同	常磐津和香太夫
同	常磐津和英太夫

三味線	常磐津 東 蔵
同	常磐津 啓寿郎
上調子	常磐津 幹寿郎

六、

清元

筐花かたみのはな乎なむかし向のそで橘のか

(吉原雀)

浄瑠璃	清元 栄志太夫
同	清元 幸寿太夫
同	清元 一太夫

三味線	清元 勝三郎
同	清元 志寿造
上調子	清元 美三郎

七、

長唄

勧かん

進じん

帳ちやう

唄	芳村 伊十郎
同	芳村 伊知蔵
同	芳村 伊之助
同	芳村 金四郎
同	杵屋 正一郎

囃子

三味線	杵屋 正次郎
同	杵屋 正園
同	杵屋 佐助
同	杵屋 栄次郎
上調子	杵屋 弥太郎
笛	福原 徹彦
小鼓	福原 智浩
小鼓	藤原 智秀
立鼓	福原 鶴祐
大鼓	福原 鶴八郎

(終演予定 午後七時半ごろ)

○一部の出演者に変更のある場合はお許し願います。

第一部

一、赤壁の賦

昭和九年(一九三四)九月、NHKの委嘱で中能島欣一が作曲し、同月に放送され、十一月に演奏会で初演された。のち昭和三十五年に箏替手を補作。歌は中秋の名月にちなんでNHKが募集した歌詞の第三席の入選作で、松本一太の作。

宋の詩人蘇軾の詩『前赤壁賦』を自由に訳したもので、中秋の名月の夜、長江に船を浮かべ、親しい友と酒を酌み交わし、古戦場をしのび、変わらぬ名月と水の流れを楽しむという内容。古典の伝統にしたがいながら、新しい技法を取り入れて評判になり、今日でも名作の評価の高い曲。序奏と末尾は四分の五拍子。途中二か所の長い合の手は手事風。尺八独奏の間奏は自由リズムで、中国の洞簫(竹製の楽器)を模して名月清風の雰囲気を描写してきかせどころとなっている。今回は序奏と間奏を入れての演奏。

二、廓の仇夢(権八)

大正八年(一九一九)十月、日本橋倶楽部で開催された常磐津家元秋季大会で初演。竹柴金作作詞、六世・七世文字太夫の合作。

実説の平井(芝居では白井)権八は以下の通り。鳥取藩松平相模守の家来本庄助太夫が、同僚の平井正右衛門を侮辱したので、正右衛門の長男権八はその夜本庄方へ押しかけ、助太夫を殺して江戸へ向かう。その途中関所を破り、江戸へ来てからは吉原三浦屋の小紫に馴染み、遊興費に困ったために多くの殺人を犯し、ついに捕えられて鈴が森で磔の刑にされた。延宝七年(一六七九)の事という。

慶安三年(一六五〇)に死んだ幡随院長兵衛とは時代が合わないが、鈴が森で出合うという設定、また目黒の比翼塚の伝説もあって、白井権八と小紫は人気の高い人物となり、歌舞伎や清元などでも親しまれている。

この常磐津では、権八は裸馬に乗せられて浜川、鮫洲を引き回され、鈴が森の刑場で磔になる。心残りや世話になった長兵衛に迷惑がかからないかということ。やがて罪状が読み上げられ、槍で刺されあわやという時、廓を抜けた小紫が駆けつけ、名残を惜しむ。しかしそれは馴染みの遊女小紫の部屋で見た夢であった。が、それは正夢で、大勢の捕手に囲まれるという場面。前後の場面が対照的で、追いつめられた若い二人の心情がいたましい。

三、お夏笠物狂(お夏)

初代都一中の作曲。原作は宝永四年(一七〇四)に初演された近松門左衛門作の「五十年忌

歌念仏」。その下の巻「おなつ笠物狂」をほとんどそのまま一中節に脚色。正徳五年（一七一五）に初代一中が初めて江戸下りをした時、市村座で語って大評判を取った記念すべき作品。これで一中節は一度に江戸で知られるようになった。

幡州姫路の商家但馬屋たじまやの娘お夏と、その手代清十郎が密通し、追放された清十郎の後を追ってお夏が家出をするというのが元の事件らしい。実説は明らかでないが、清十郎節とか清十郎踊りが流行し、歌祭文などでも歌われ、歌舞伎にも脚色された。井原西鶴は貞享三年（一六八六）に浮世草子『好色五人女』の第一話に「姿姫路清十郎物語」として取り上げ、さらに知られるようになった。

恋人の清十郎が誤って人を殺して捕えられたの知ったお夏は、狂気して笠を持ってさまよう。その後を清十郎の許嫁と妹が歌比丘尼うたびくにの姿になって追うという場面。当時の流行り歌「夜さ来いと」や「向かい通るは」を使って派手ではあるが、狂気したお夏の心情が伝わってくる名曲。

四、明烏夢泡雪―雪責め―

通称「浦里時次郎」。初代鶴賀若狭掾の作詞・作曲。作曲年代は未詳だが、およそ安永初年（一七七二）ころにはできていたらしい。ふつう上下に分けて上を「浦里部屋」、下を「雪責め」という。

春日屋時次郎は山名屋の浦里と馴染みを重ね、借金で首が回らなくなって一緒に死のうと、浦里の部屋に隠れていたが、遣手やりてに見つけられ、浦里は亭主に引き立てられ、時次郎は叩き出されてしまう（ここまでが上）。

雪の降る山名屋の中庭で、浦里とかむろのみどりは松の古木にしばらく、亭主に責められる。隣の二階からは三下りの「めりやす」が聞こえてくる。やがて屋根伝いに時次郎が助けにくるまで。

「蘭蝶」「伊太八」と並ぶ新内節の代表曲で、全曲を演奏するには一時間半以上かかる。責められてもあきらめない浦里のクドキ「主を思うて」のあたりはいつ聞いてもせつない。

五、越後獅子

文化八年（一八一―）三月、江戸中村座で三世中村歌右衛門が踊った七変化舞踊「遅桜手爾おそざくらてに葉七字はのななもじ」の一として初演。松井幸三作詞、九世杵屋六左衛門作曲。越後の国から出稼ぎに来た角兵衛獅子を主人公にしたもので、京阪では越後獅子、江戸では角兵衛獅子と呼ばれた。ふつう親方一人、子供二人で回って歩いたが、ここでは一人で休んでいて、故郷を思い出すという設定。初演されたころ、江戸では甚句やおけき、小千谷縮などが流行していたのでそれを取り入れ、獅子の洞返りに代えて布晒しをおしまいにつけた。

曲は地歌の「越後獅子」「晒さらし」を多く利用していて、作詞、作曲、振付をそれぞれ一夜づけの急拵えだったと伝えられているが、今日では長唄の代表的名曲のひとつとして流行している。なおプッチーニのオペラ「蝶々夫人」にはこの曲の一部が取り入れられている。

六、壺坂観音靈驗記―沢市内の段―

明治十二年（一八七九）十月、大阪大江橋座で六世豊竹島太夫により初演。これは明治初年に書かれた作者不明の浄瑠璃「観音靈場記」の一部である。「壺坂寺沢の市住家の段」を、二世豊沢団平夫妻が改作・作曲したものだ。ただし現行曲は、その後団平がさらに改作し作曲し直したもので、明治二十年二月に大阪彦六座で初演されたもの。この時は三世竹本大隅太夫が語った。

大和の国壺坂の土佐町に住む沢市は、疱瘡ほうそうが原因で盲目となった。そのひがみもあり、妻のお里が毎晩隠れて出かけるのを非難する。しかしそれは夫の目が見えるように、壺坂の観音様へお参りしているのだと聞き、貞節な心に打たれ、二人は連れ立って参詣に出かける。今日はここまで。このあとは目が見えるようになるとは信じない沢市は、妻の目を盗んで谷に身を投げてしまう。それを知ったお里は、あの世で手を引く人がいなければ不自由であろうと後を追う。そこへ観音音があらわれて二人の命を助け、沢市の目も見えるようになるという筋で、明治以降の新作の中ではもともと人気が高い。

七、深山桜及兼樹振（保名）

文政元年（一八一八）三月、江戸都座で、三世尾上菊五郎が演じた四季の七変化舞踊のひととして初演。篠田金治作詞、清沢万吉作曲。

もとは享保十九年（一七三四）初演の義太夫節「芦屋道満大内鑑あしやどうまんおうちがみ」の二段目「小袖物狂の段」。恋人柳の前が自害したのを知った安倍保名が、形見の小袖を肩に狂乱となってさまよう場面。蝶とたわむれ、来山翁が愛玩したという土人形の話から吉原での遊女との口説になる。歌詞に吉原の事を入れるのは当時の習慣。「夜さの泊りは」は狂言「韃靼」の小謡で、倒れ伏すまで。狂乱ものの主人公は女性がほとんどだが、これは「腕久」とともに数少ない男性の狂乱もの。来山翁とは小西来山のこと。大阪の俳人で奇人として知られた。常に女性の土人形を愛玩し、のち今宮村に隠棲したので、今宮の来山翁といわれた。

第一部

一、千鳥の曲

吉沢検校（一八〇一〜七二）作曲の「古今組」五曲の一。はじめ胡弓曲として作曲されたものらしいといわれ、安政二年（一八五五）に箏曲化したものといわれている。

前歌は『古今和歌集』賀の部の読人知らずの歌。後歌は『金葉和歌集』冬の部の源兼昌の歌で、百人一首でも有名な歌。箏曲としては「六段」と双壁をなすほど世に知られた曲で、前弾は楽の手、手事はマクラ（序）と本手事からなり、マクラを波の部、本手事を千鳥の部ともいう。波の音と千鳥の鳴き声を象徴的にあらわしているのが特色。

二、千日寺名残鐘（三勝）

別称「三勝縁切」。初代鶴賀若狭掾の作詞・作曲。原作は延享三年（一七四六）初演の義太夫節「女舞剣紅楓」おんなまはつるぎももぎ（春草堂作）の五段目。

元禄八年（一六九五）十二月七日、千日寺の焼き場裏（通称サイタラ畑）で大坂五条新町の茜屋半七と、長町四丁目美濃屋の養女三勝（湯女とも女舞芸人とも）が心中するという事件があった。これは歌祭文や踊り音頭をはじめ、浄瑠璃、歌舞伎に脚色されて広まり、浮世草子や読本の題材にもなっている。

茜屋の半七は、お園という女房がありながら、五年前から三勝という踊り子に馴染み、お通という子までなした仲である。その三勝のところへ半七の母親が訪ねてきて、半七と別れてくれと頼むところ。三勝のクドキ「一夜流れの仇夢も」以下がよく知られているが、母親の「せめて一日夫婦にして」や三勝の「真実ほんの母さんに」など、きかせどころが多い。

三、熊野

五世山彦河良作曲。嘉永二年（一八四九）成立。『平家物語』によつた能の「熊野」を脚色したものの。能では昔から「熊野・松風に米の飯」といわれ、秋の「松風」に対して春の名曲として名高い。

歌詞は山田流箏曲から借りたもの。能のあらすじは、遠江の池田の宿の熊野という女性は、都に召されて平宗盛の寵愛をうけていた。そこへ老母が病気であるという手紙が来たので、故郷へ帰る事を願う。しかし宗盛は、今を逃すともう二度と見られないかも知れない花見に、無理に熊野を同道して帰国を許さない。やむなく牛車に乗って清水へ行き、舞を舞っていると急に村雨が降ってくる。そこで「春雨の…」の古い歌（『古今和歌集』大伴黒主）を歌い、また自らも「いかにせん…」（『平家物語』巻十にある）と、東国で病気の老母を心配する歌を歌ったので、宗盛は感動して熊野の帰国を許すという場面。

河東節は清水へ着いて酒宴が始まったところから、許されて東国へ出立するまでにまとめている。

四、加賀見山旧錦絵―長局の段―

天明二年（一七八二）正月、江戸外記座で初演。容楊黛作詞。江戸松平周防守邸での下女の敵討ちを中心に、加賀騒動を扱った歌舞伎「加賀見山廓写本」（さのまきがき）を合わせて脚色したもので、全十一段。現在では六段目の「鶴が岡草履打」と七段目の「長局」だけが残されている。

剣澤弾正と一味してお家横領を企む局岩藤は、じやまになる中老尾上が町人の娘であることから、武芸の心得を試そうとする。折から来合わせた尾上の召使いお初は、浪人の娘で武芸ができたので、尾上に代わって試合をして岩藤を打ちすえる。恨みに思った岩藤は、忍びの者に蘭奢待の香木を盗ませる。弾正が正使として受け取りに来たが、箱の中には草履が入っていた。岩藤は尾上の落ち度を言い立て、草履で尾上を打つ。ここまですが前のあらずじ。

岩藤は長局（奥女中たちの個室のあるところ）の自分の部屋に戻り、遺書をしたため、お初を自分の実家へ使いに出す。草履打ちのことやその様子から、お初は尾上のが気がかかるが、命令なので使いにでる。その途中、行き合った辻占の言葉と、烏啼きの不吉さに、文箱を開けてみると中には草履と書置きが入っていた。あわてて邸へ引き返すと、尾上はすでに息が絶えていたが、岩藤の密書を発見して、敵討ちの決心を固めるまで。

五、乗合船恵方万歳（乗合船）

略称「乗合船」天保十四年（一八四三）正月、江戸市村座初演。三世桜田治助作詞、五世岸

澤式佐作曲。初演の時は富本・長唄・竹本と掛合だったが、のちに全曲常磐津に改められた。

十九世紀初めに聖天下（しやうてんした）から向島の三囲神社鳥居下まで渡し船が出るようになった。竹屋の渡しである。向島は新梅屋敷の梅や隅田川添いの桜、名物の食べ物屋などがあつて、四季おりおりの手頃な行楽地になり、とくに正月七日間の七福神詣では大流行した。初詣でをかねて七福神を回り、土産物の焼き物を集めて楽しんだ。それを取り入れたもので、初春の江戸隅田川の渡し船に、いろいろな職業の七人が乗り合わせるといふ趣向。渡し船を宝船に、七人を七福神に見立てたもの。江戸時代も終り頃の風俗や流行をしゃれた文句でつなぎ、おしまいは万歳と才蔵でしめくくる。

六、筐花乎向橘（吉原雀）

この題の曲は長唄と清元にある。長唄の方が先で、明和五年（一七六八）初演。それを文政七年（一八二四）に清元に脚色・編曲したもの。

清元は五変化舞踊の一つで、四代目竹之丞百回忌追善曲なので「かたみのはなむかしの…」という題名。三升屋二三治作詞、初世清元齋兵衛作曲。長唄「吉原雀」を少し改め、前後を新しく足したもの。「吉原雀」とは「ヨシキリ」のことだが、一方で吉原遊廓を冷やかに歩く人のことを言うようになった。それを主題にしたものなので、吉原の風俗や遊びが賑やかに展開する。時代や場所に関係なく、何にでも吉原のありさまを加えることが当時の流行だったのだ

が、これは吉原そのものを主題にしていたので、とくに喜ばれた。なお鳥尽しを一中節の「傾城浅間嶽」から取り入れているのが、清元の特徴。

七、勸進帳

天保十一年（一八四〇）三月、江戸河原崎座初演。三世並木五瓶作詞、四世杵屋六三郎（六翁）作曲。能「安宅」を題材とした歌舞伎十八番「勸進帳」の伴奏音楽。

兄頼朝に追われ、奥州平泉をさして落ちて行く義経・弁慶一行は、安宅の関で富樫左衛門にとがめられるが、弁慶の機転で逃れる。近くの山中で一息ついた義経は弁慶に礼をいい、弁慶はともに戦ったことを思い出して語る。その後を追ってきた富樫に酒をふるまわれるが、弁慶は延年の舞を舞い、一行は奥州へと向かう。

長唄だけの演奏では筋がわかりにくい、もとの歌舞伎「勸進帳」があまりにもよく知られているのと、長唄が名曲なので、演奏曲としての人気が高い。一中ガカリ「ついに泣かぬ」、説経ガカリ「げにげにこれも」、半太夫ガカリ「人目の関」など変化もあり、きかせどころは多く、お囃子も大活躍で盛り上げる。今日の演奏会をしめくくるのにもっともふさわしい曲。なお「いざや舞を舞おうよ」の後の延年の舞の合方、二度目の「鳴るは瀧の水」の後の瀧流しは、明治になつて三世杵屋正次郎が作曲したものだ。

▽歌詞の中に今日の人権意識に照らして一部不適切な語句がありますが、古典の作品をそのまま演奏いたしますため、そのままにしたことをお許し願います。

御礼 邦楽連合会

本日はようこそおでかけ下さいまして、ありがとうございますございました。何かと不行き届きの点もございましたが、お許しを願ひまして、どうかごゆっくりとお楽しみ下さいますよう、お願い申し上げます。

今までには、このようにしてまとめて御鑑賞していただく機会は、少なかったように思います。その少ない機会を大切にしようと、出演者も一生懸命でございます。これからも、どうか続けて邦楽に変わらぬ御支援をいただけますように、お願い申し上げます。

来年も同じくここ国立劇場小劇場で、三月四日（土）に開催する予定でございます。番組がきまり次第、御案内をお送りいたしますので、はさみこみのアンケート用紙に、おところ、おなまえをお書き込みの上、受付にお渡し下さいますよう、お願い申し上げます。また、今日おきき下さいました御感想や御意見などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のために御指導を賜りますよう、合わせてお願い申し上げます。ありがとうございます。